

未来への伝承

通商産業大臣賞トロフィー

—権威ある競技大会への歩み

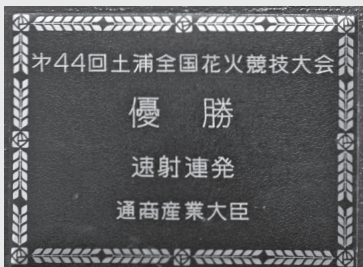
土浦市が全国に誇る秋の行事に土浦全国花火競技大会(土浦の花火)があります。今から94年前の大正14(1925)年に第1回大会が行われ、今年で88回目を迎えます。全国の花火師が、日頃の成果をスターメイン・10号玉・創造花火の3種目で競い合います。

中でも、土浦の花火を代表する競技がスターメインです。仕掛花火の一部として打ち上げられていた連発花火を、昭和34(1959)年の第28回大会から「速射連発」として独立させました。一発ずつ鑑賞する日本の花火の伝統に、多数の花火を連続して打ち上げる画期的な競技が加わりました。

昭和36年、土浦の花火で通商産業大臣賞が創設され、のちに「速射連発」の優勝者に同賞を授与することになりました。第51回大会から「速射連発」は「スターメイン」と改称され、現在も経済産業大臣賞が与えられています。



▲ 通商産業大臣賞トロフィー
(個人所蔵)



▲ トロフィーの銘板

左の写真が昭和50年の第44回大会で授与された通商産業大臣賞トロフィーです。土浦市内で花火製造を行っていた土浦火工株式会社(土浦火工・平成3年解散)が受賞しました。この時の花火の玉名は、「躍進土浦発展の輝」でした。

土浦火工は北島義一(1908〜79)が昭和20年に設立し、翌年9月には戦後いち早く土浦の花火の復活を遂げ、戦後の競技大会の発展を支える原動力となりました。

昭和23年から36年にかけて、隅田川の両国橋付近(東京都台東区・墨田区)では、江戸時代からの伝統を持つ両国川開花火(のちの隅田川花火大会)が行われました。日本の花火史上、総理大臣盃が出されるようになったのは、両国川開花火が最初です。昭和34年、初の総理大臣盃を受けたのが、義一が率いる土浦火工でした。

義一は昭和34年に日本煙火工業会々長に就任し、昭和37年には社団法人日本煙火協会設立にも参画しました。花火業界の要職にあつて、花火の保安に尽力し、花火師の地位の向上を図りました。

土浦の花火で通商産業大臣賞が授与されることになった背景に、義一の関係省庁への働きかけがあります。公私の努力が通商産業大臣賞につながりました。

昭和38年、通商産業大臣賞は秋田県大曲市(現在の大仙市)の全国花火競技大会(大曲の花火)でも授与されるようになります。「二か所に賞は出せない」と、難色を示す通商産業省を説得したのは義一だったといわれています。

平成12年、大曲の花火で内閣総理大臣賞の授与が内定したという情報を得て、土浦市でも内閣総理大臣賞を掛け合いましたが、同様に「二か所に賞は出せない」と断られてしまいました。今度は大曲の花火関係者が加勢してくれ、両大会で内閣総理大臣賞が授与されるようになり、現在に至っています。大曲と土浦とは、花火で縁が結ばれています。

本文で紹介した両国川開花火の総理大臣盃、通商産業大臣賞トロフィー、内閣総理大臣賞杯の3種を、博物館テーマ展「秋の夜空を彩る花火―土浦全国花火競技大会の歴史」で11月10日(日)まで展示しています。ぜひご覧ください。

岡市立博物館(☎824・2928)